

介護という 新しい分野に ふさわしい 仕事の仕方が 始まっている

三好春樹

かつては「最近の若い者は…」と言われた側だったが、今では茶髪にピアスで路上に座り込んでいるのを見て「最近の若い者は…」と言う側になってしまった。

しかし考えてみると、今や介護の世界はその若い者が中心になっているのだ。私たちの時代には、介護の仕事をするなどという若者はほんの少数だったから、私はそれだけでも感心してしまう。

それに、若い人たちだけで運営している事業所がじつにいい介護をしている。「最近の若い者」はたいしたものなのだ。これまでの世代が老いや痴呆にどう関わっていくのか、知恵と技を持ち得なかったというのに、彼らはそれを自然体で手に入れているように見える。なぜだ？

まず、年輩者がいないことがその理由のひとつだろう。経験のある者が権威として存在していないことだ。権威だと本人が思っているだけで、古い福祉の枠や安静看護の権威でしかないのだから、新しい分野の介護にはむしろ邪魔なのだ。

あとは、若者の非常識がいいのだと思う。常識のある人は起業するにあたって、ちゃんと計算をする。常識的な家賃で家を借り、常識的な給与が必要だと考える。でも若者たちを見ていると、非常識な家賃で貸せと迫る。非常識な給与で人を雇う。

北海道稚内の鈴木総生さんの事業所のスタッフは、資格があろうがなかろうが、みんな時給700円だ。いくら稚内でも非常識な設定だが、ちゃんとした事業団の職員が転職してきて辞めないという。そこには、世間になかった仕事のやりがいがあるとしか思えない。

もっとも鈴木さんは私と同じ世代のりっぱなおじさんだ。だが、その非常識さでは若者だといっていいだろう。

介護という新しい分野にふさわしい仕事の仕方が始まっている。そう実感できる特集になったと思う。